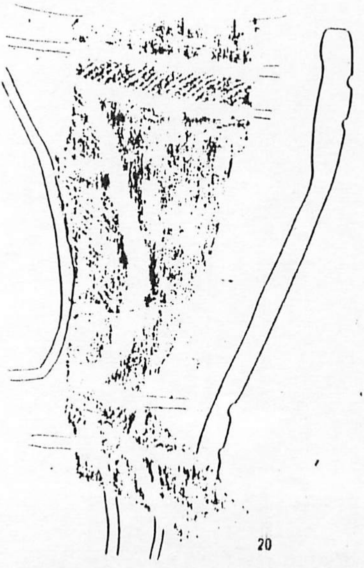
埼玉県上福岡市内遺跡群　埋蔵文化財の調査（Ⅵ）

正　誤　表

	誤	正
ⅳ頁２１行	駒宮史郎	駒宮史朗
２頁２６行	木正Ｌ字形	不整Ｌ字形
５頁　９行	第５図	Ｃ－５区
２８行	Ｆ－７区	Ｇ－６区
１５頁１８行	胆土は	胎土は
２５頁３１行	１６	１７
２９頁１０行	前器の土器	前期の土器
１９行	図すしたとおり	図示したとおり
２１行	ＰＬ　に	ＰＬ７に
３３頁１６行	懸重文が	懸垂文が
３７頁１１行	に　を立てているが	に爪を立てているが
３８頁２６行	企画性	規格性
３９頁１９行	優蝕と	浸蝕と
３３行	二重に囲る	二重に巡る
４０頁　７行	懸重文系	懸垂文系
１２行	異ってうるようにも	異っているようにも
２２行	扨上遺跡	扨上遺跡
２９行	を姿している	を示している
４１頁１４行	四本住穴	四本柱穴
３３行	は時強	は時期
４２頁　３行	都東	都市
９行	調査時例に	調査事例に
１４行	染付広東腕	染付広東碗
２６行	現状遺構は	段状遺構は
２７行	削開された	開削された

第26図



1.川崎遺跡　2.川崎貝塚　3.上福岡貝塚・権現山遺跡　4.川崎横穴群　5.ハケ遺跡　6.長宮遺跡　7.城山城跡　8.丸橋遺跡　9.松山遺跡　10.滝遺跡　11.11.富士見台横穴群　12.羽沢遺跡　13.黒貝戸遺跡　14.打越遺跡　15.水子大応寺前貝塚　16.大井戸跡遺跡　17.東台遺跡

第1図　遺跡位置図(1)

第２図　遺跡位置図(2) (1/10,000)

Ⅰ　調査に至る経過

上福岡市は多摩川がつくった扇状地である広大な武蔵野台地の端に位置している。この台地上からは、荒川が形成した沖積地を一望のもとに見わたすことができる。現在の台地は、荒川の一支流である新河岸川に面している。このような立地は徐々に形成されてきたもので、縄文時代の前期前半には、この台地の下まで遠浅の海となっていて、その後徐々に海が引いていき、現在の海岸線をつくった訳である。そして荒川がつくった沖積地は水田地帯となり、また新河岸川は物質や人々を輸送する交通路となってきた。このような地形的環境にある上福岡市には、原始・古代から近世、近代までの遺跡も非常に多く、文化財にも優れたところである。

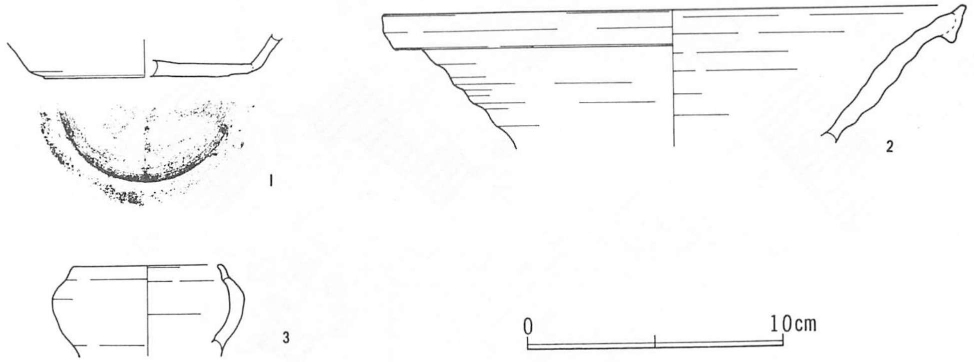
当市は東京より至近距離にあるために宅地化が昭和30年代より始まり、現在まで進んできた。最近は宅地化も鈍くなってきたが、それでも、遺跡に対しては何らかの影響を与える所がある。

特に、近年は再開発の状況を呈してきた。昨年度は、市道の舗装工事などで、これまで無いと言われてきた、古墳が発見された。再開発といえども、未だ地下の遺構は破壊されていないものがある証拠となったのである。

市では、過去6年間、国庫補助を受けてこれらの民間の小規模開発に対処するため、埋蔵文化財の調査を実施してきた。これらの遺跡調査は、庁内関係各課と連絡調整して行ったものである。農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また建設部建設課から開発事前協議建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会に通知され、教育委員会は再度、遺跡地図と照会のうえ現地調査を実施し、遺跡の状況を確認し、そして遺跡に影響を及ぼすとみなされる工事主体者（原因者）に連絡し、協議を行った。その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者（原因者）から依頼され、教育委員会が発掘主体者となって調査を実施することになったものである。今年度は、下記の6遺跡に対して、調査を実施した。

	（遺跡名・調査区名・所在地）	（原　因）	（調査面積）	（調査期間）
1	滝遺跡第9次調査区 滝1－4－4	住宅建設（菅原光夫）	466 ㎡	5月11日～5月22日
2	滝遺跡第10次調査区 滝1－3－17	住宅建設（星野正己）	363 ㎡	6月1日～6月12日
3	滝遺跡第11次調査区 滝1－4－2	物置建設（星野一雄）	33.12㎡	6月28日～6月30日
4	松山遺跡第6次調査区 松山2－6－16	住宅建設（内田喜代治）	330 ㎡	8日13日～8月28日
5	川崎遺跡(宅地添地区第4次)調査区 大字川崎字宅地添219−2, 219−3	住宅建設（鈴木政樹）	301 ㎡	9月25日～10月9日
6	滝遺跡第12次調査区 滝1－4－2	住宅建設（星野幸裕）	94 ㎡	12月22日～12月24日

（笹森健一）



第６図　松山遺跡第６次調査出土遺物実測図　(1/3)

けて自然釉がかかり、内面は黄白色。焼成は堅緻。胎土は白色粒子を多量に含む。ロクロ整形痕は明瞭。頸部はやや外傾し、鳥嘴状口縁部は弱く外反する。

３　須恵器小形壷、底部を欠損、現存¼、推定口径 5.8㎝。色調は青灰色で、外面は自然釉がかかり黄白色を呈す。焼成は堅緻、胎土は白色粒子を多量に含む。ロクロ整形は外面不明瞭である。内湾する体部から稜を有して短かい口縁部が内傾する。口唇は平担。おそらく有蓋であろう。(小俣悟)

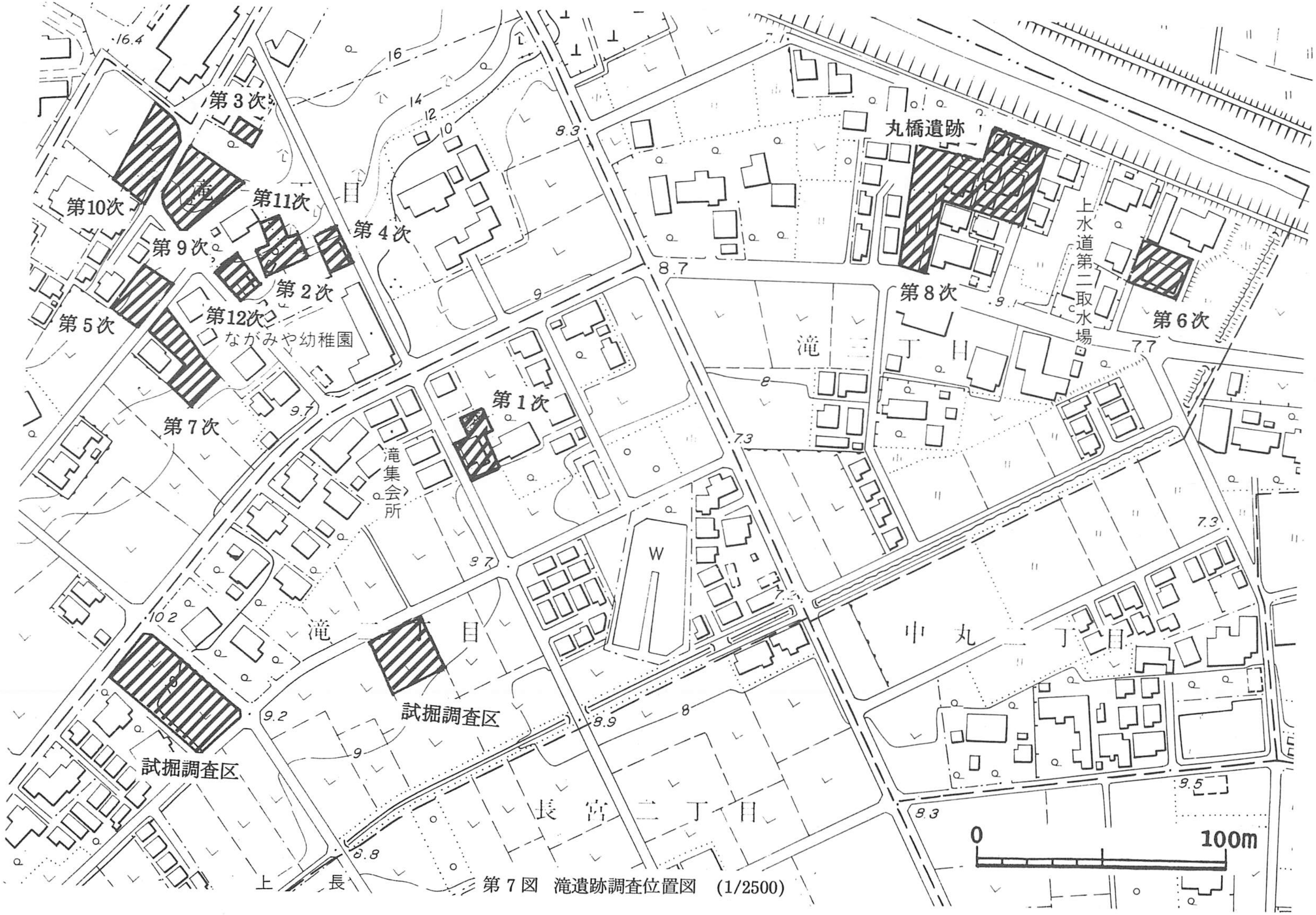
Ⅲ　滝遺跡(第９次，第10次，第11次，第12次)の調査

滝遺跡は、滝１丁目から３丁目にかけての遺跡の総称である。標高９ｍの平坦な台地と、それよりも一段高い台地で北西方向の標高 14～16ｍの台地上にある。高い台地上の北側には、著名な上福岡貝塚があり、また、新河岸川縁辺の台地上には最近明らかになりつつある、古墳時代初頭の五領期の墳丘墓群である権現山遺跡が存在している。

滝遺跡は、この権現山墳丘墓群をつくった人々の集落を中心とした、その他、古墳時代から平安時代まで断続的に集落を営まれた場所を中心としている。滝遺跡は、これまで８次にわたって調査してきた。その内容は次のとおりである。

第１次調査	古墳時代初頭住居跡１基
第２次調査	〃　中期住居跡１基
第３次調査	〃　初頭住居跡１基
第４、５、７次調査	なし
第６次調査	古墳時代中期住居跡１基、奈良時代初期住居跡１基、他に縄文時代土壙
第８次調査	〃　初期住居跡１基、古墳時代中期住居跡１基、他に平安時代土壙２

その他、同じ地域内で丸橋遺跡として調査した地区に、古墳時代初頭住居跡１基と古墳時代中期の住居跡１基がある。このように古墳時代初頭の住居跡が４基をかぞえ主体となっている。



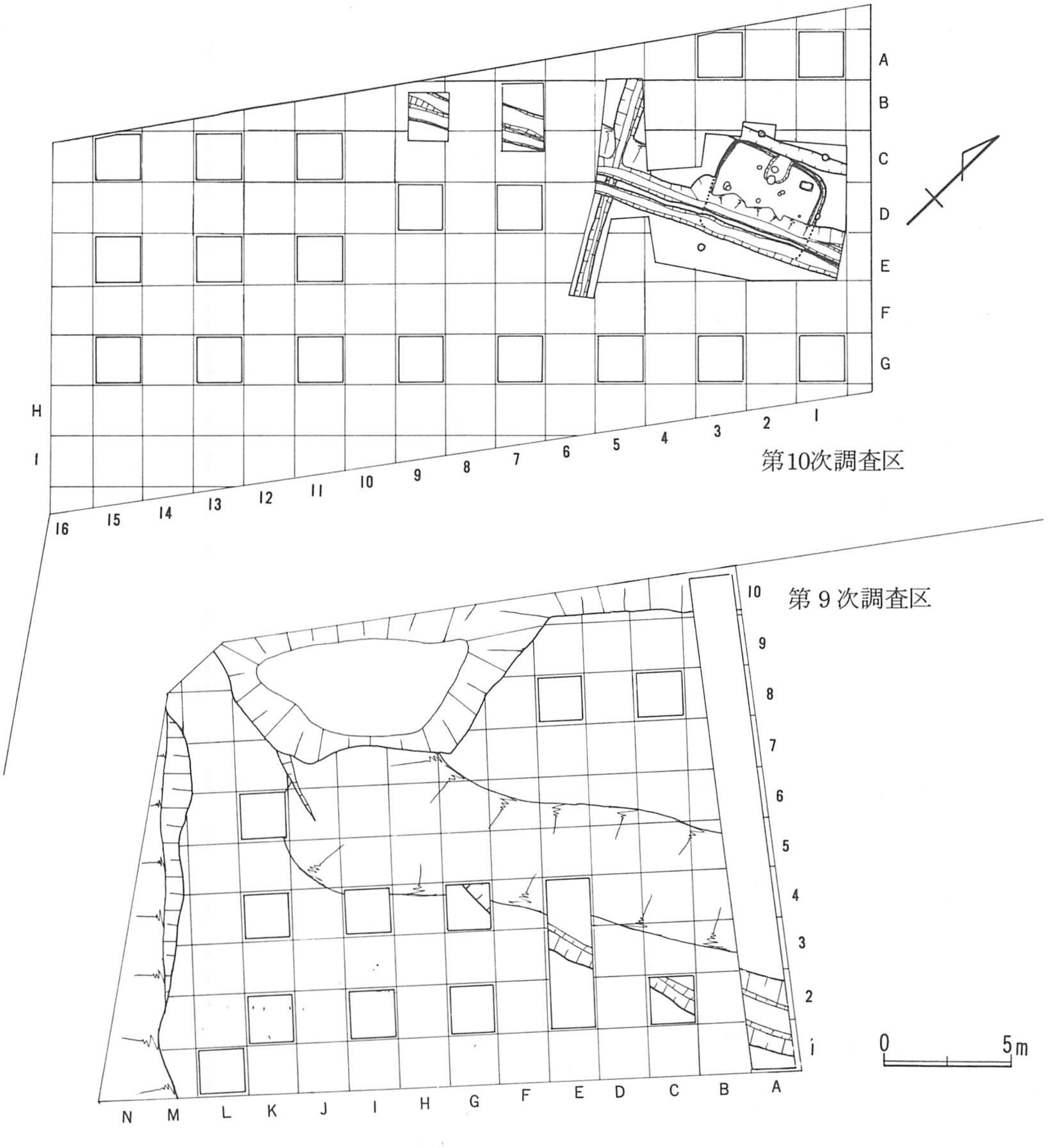
第７図　滝遺跡調査位置図　(1/2500)

第８図　滝遺跡調査区位置図

3　滝遺跡(第９次)の調査

1　調査の経過

第９次調査区のすぐ南東側は、ゆるい緩斜面となっている。したがって今回の調査区は、斜面をのぼりつめたところの平坦面にあたる地区である。調査範囲の部分は、現状では中央に溝状の落ち込んだ部分が東西に走り、それに沿った南側が土塁状に帯状に高くなっていた。土塁状のものは、西側において鈍角に曲がり、北東方向へ延びていた。また、西側は、近年の土木工事によって土を採集されて、凹地となっていた。そこで、土盛に何等かの土塁の痕跡の可能性があったので、昭和



第14図　滝遺跡第９次・第10次調査全測図 (1/300)

59年5月11日に、地形図を作成することから調査を開始した。調査区は、グリッドを南側の土地境界杭を基準にして、A～N区、さらにそれを直角にして1～10区、2mおきに設定した。当初、土塁状のもの、及び地盤の形状を観察するため、北東部分を北西方向に幅2mトレンチを入れた。さらに2mグリッドの任意の地区を選んで、第15図に示したようにローム面まで掘り下げた。

その結果、溝2基が確認された。溝1は、土盛の下にあたっているものである。溝2は、現地表面に溝状に窪んだ部分にあたり、土層観察の結果、現在の溝状の落ちこみの当初のものであることが判った。土盛は、溝2をつくったときの廃土によるものであることが判った。

一部、溝1の遺構遺跡を調査して、写真撮影、図面終了後　昭和59年5月22日、すぐ埋め戻しにかかり、すべての作業を終了した。

2　検出された遺構と遺物

溝1

溝1は、土盛り下に検出したものである。下底面は平坦で、覆土はしっかりしている。壁も、45°の勾配で立ち上がり、崩壊は少ない。出土遺物はない。C区、G区などで北西方向に角度を変えて溝2に合体する。下底面は、C区、E区の北西方向にいくにしたがって高くなっており、溝2に合体するようなので、したがって現状では、溝2に破壊されているとの判断で、これ以上の追跡はしていない。性格は不明である。

溝2

溝2は、溝1の北東にあたる。覆土はしまりが悪く、一見して現在埋没しつつある溝である。下底面は、2つの、幅20～30㎝の細い溝より成りたっている。おそらく土層区分上からは、はっきりしないが、幅20～30㎝でV字状の溝をつくったのち、再度、同じように掘りおこしたものだろう。出土遺物はない。

隣接する土塁状のものは、この溝2をつくったときに積み上げたもので、土塁のように突き固めた痕跡はない。おそらく溝2は、根切り溝にあたるものであろう。

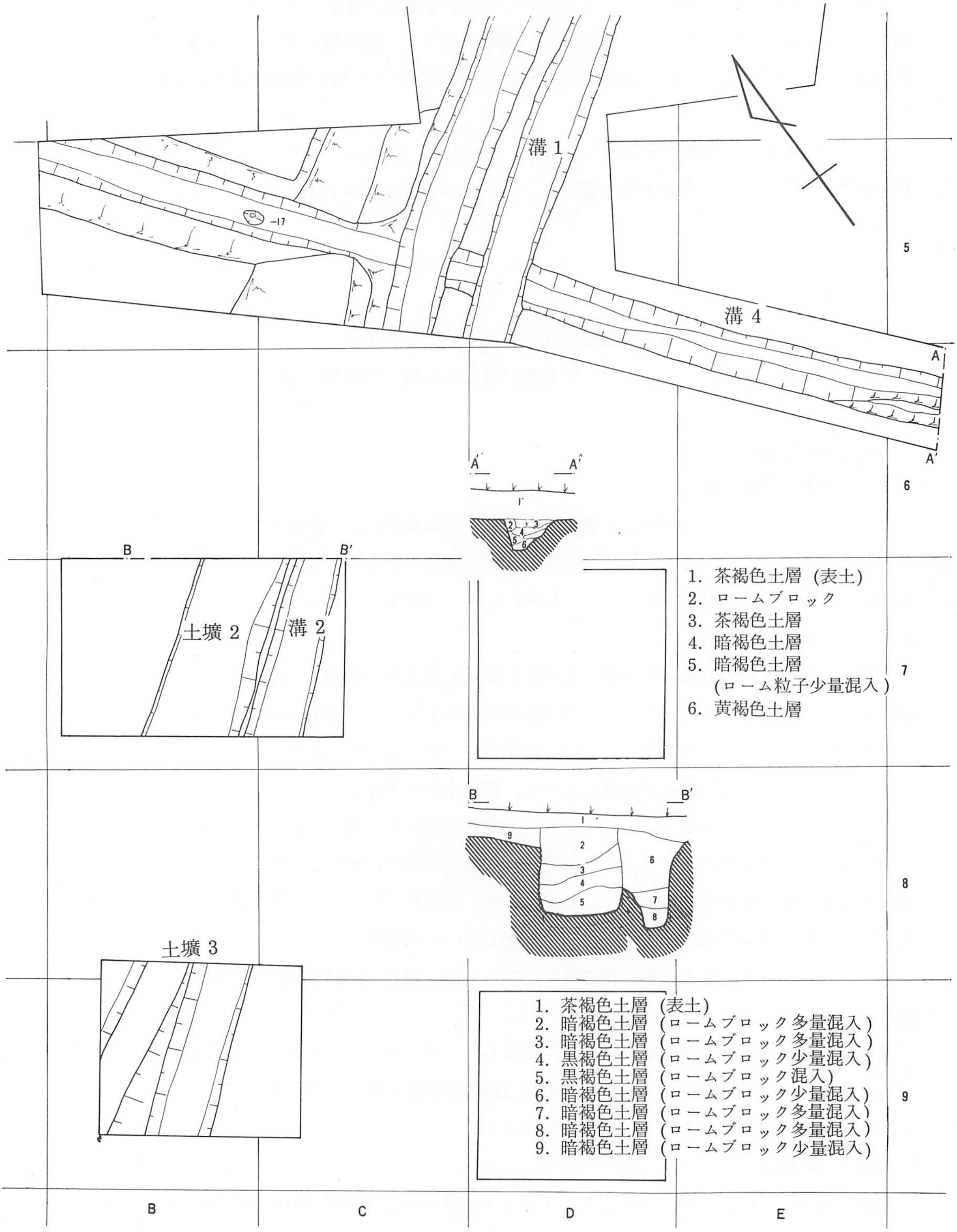
出土遺物

出土遺物は、2－E区、2－G区などで、土師器破片が10数点出土した。破片はいずれも、小破片であり、図示できない。破片は、いずれも古墳時代中葉～後葉の鬼高期のものであった。1－Hなども合わせ調査したが、遺構は確認されていない。何故、遺構もないところから散見して出土したか、不思議であったが、つぎの第10次調査によって、北方30mの地点から鬼高期の住居がこの台地面で初めて検出されたことにより投棄されたものという、理解がある程度出来た。（笹森健一）

4　滝遺跡(第10次)の調査

1　調査の経過

本調査区は耕作地であり、表面に土器破片が若干採集され、台地縁辺に立地することから、住居跡等の遺構の検出が期待されていた。現地形は、南西へ傾斜している。



第16図 滝遺跡第10次調査実測図(1)(1/60)

昭和59年6月1日に、2ｍグリッドを設定して調査を開始。調査区東境界線を基準に、北から南へA～I、東から西へ1～16と呼称した。東からグリッド毎に掘り下げて、遺構確認に入った。東側はローム面まで約30㎝、西側は約20㎝で浅くなる。ローム層の上層は耕地土でしまりが良くない。

C－1区で焼土混り黒褐色土中から土師器片が出土し、住居跡の存在を予想された。周囲を拡張した結果、住居跡プラン及び溝等を確認し、ただちに遺構の掘り下げに入った。更に、その北西側で溝、土壙を検出。

6月11日住居跡、溝の調査を終了させ、ただちに埋め戻しに入り、翌12日に埋め戻しを終えて現地を撤収した。

検出した遺構は、古墳時代後期住居跡1軒、溝4条、土壙3基、ピット群であり、遺物は住居跡を中心に土師器がまとまって出土している他、表土から縄文土器片、陶器片が少量出土している。

2 検出された遺構

第11号住居址(第17図)

確認面が浅い為、住居址の上面が若干削平され、更に南半分は、溝1・2に破壊され、一部周溝と床面が確認できたのみで、不明瞭である。また、北壁も溝3と接している。プランは隅丸方形で、東西長4.45ｍ、南北推定長3.8ｍとやや東西に長い。主軸の方位はN－5－Wである。 壁はほぼ垂直で、高さ35㎝である。

壁溝は、カマド部分を除いて全周しているものと推定され、幅40～10㎝、深さ6㎝である。床面は平坦で比較的しっかりしている。床面に不規則に小ピットが検出されたが、覆土が、カマドのピットと類似しており、全て新しいものと推測され、柱穴は不明である。

カマドは北壁のほぼ中央に設置されている。袖は比較的残存していたが、煙道部上面が溝3に破壊され、また、天井部も新しいピット等により崩壊していた。残存全長115㎝、幅95㎝で、袖の内面及び火床面はよく焼けている。カマドの下は大きく擂鉢状に掘り込まれており、全体を埋土で整地してから両端に粘土で袖を構築している。また、袖の補強として、土師器甕を倒立させている。更に、天井部の補強として、土師器壷片を使用していた可能性がある。

カマドの東側には、貯蔵穴が検出された。55×40㎝、深さ44㎝の箱型で、内側から少量の土師器甕片が出土している。

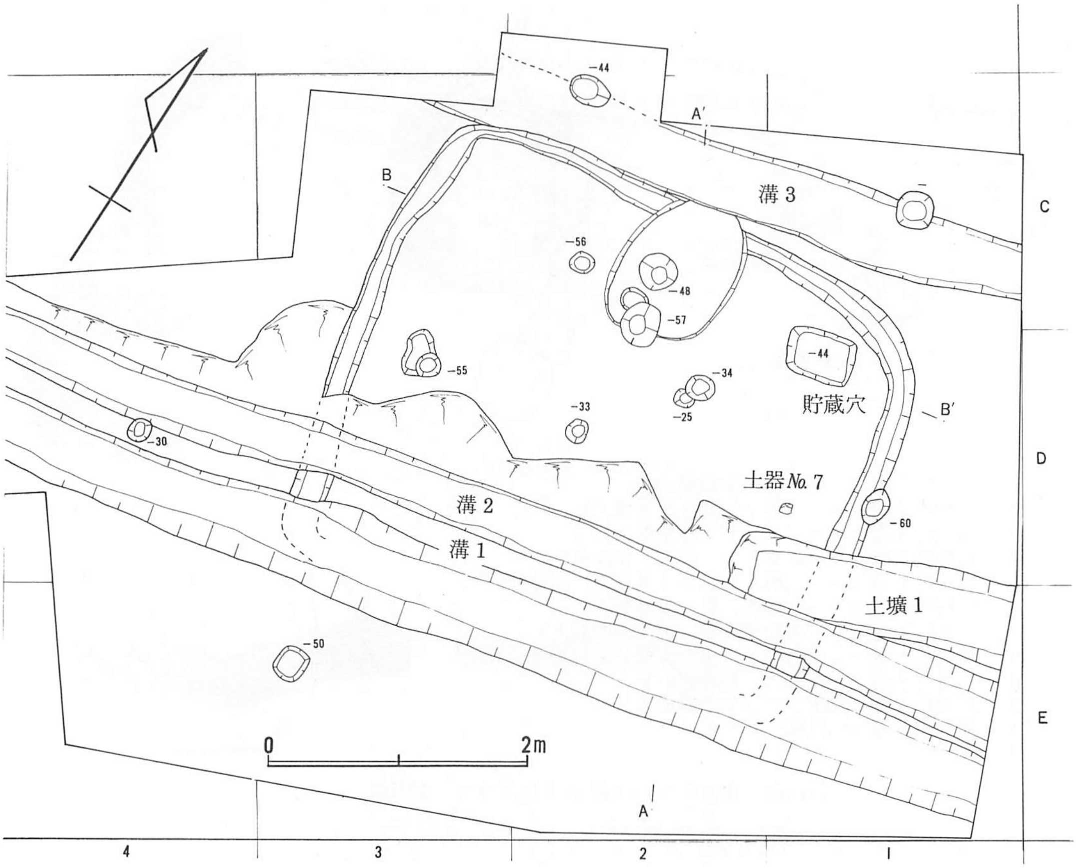
遺物は、カマド内及び周辺から集中して出土している。カマドからは、袖の土師器甕の他、焚口部付近からも土師器甕が2個体出土し、貯蔵穴南方の床面上にも土師器甕が出土しているが、坏は小片が数点のみである。

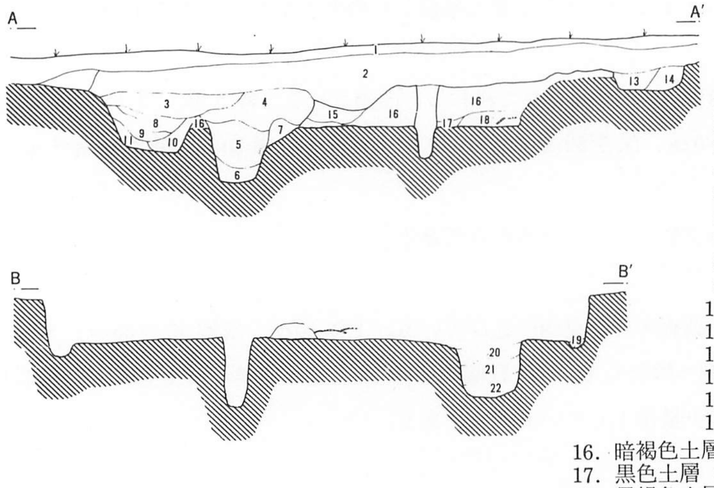
土壙1(第17図)

東側が調査区外にかかり、全長は不明であるが、幅60㎝、深さ約60㎝の長方形。南側は溝2に切られている。覆土は、ロームブロックを含んでおり、やわらかな黒色土である。

土壙2(第16図)

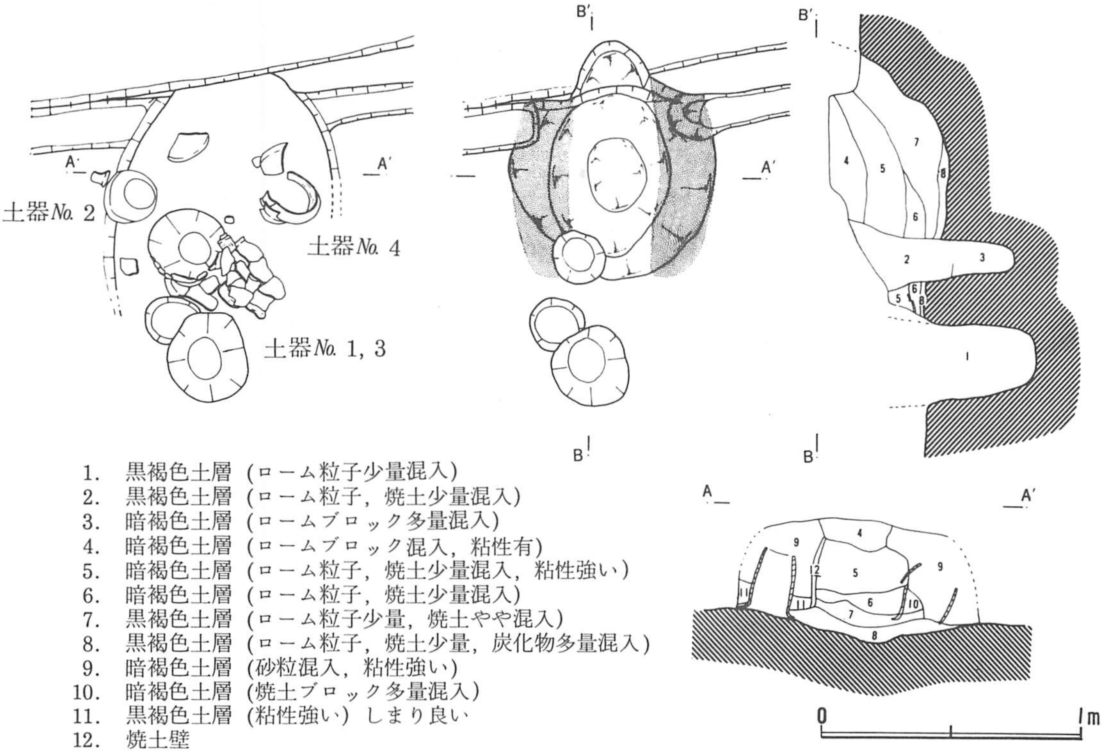
東・西側を確認していないが、幅80㎝、深さ60㎝の長 方形である。形態、覆土とも土壙1に類





1. 茶褐色土層 (表土)
2. 暗褐色土層 (耕作土)
3. 暗褐色土層
4. 暗褐色土層
5. 黒褐色土層
6. 黒褐色土層
7. 暗褐色土層
8. 暗褐色土層
9. 黒褐色土層
10. 黒褐色土層
11. 黒褐色土層
12. 黒褐色土層
13. 黒褐色土層
14. 黒褐色土層
15. 暗褐色土層
16. 暗褐色土層 (焼土少量混入)
17. 黒色土層 (焼土，炭化物少量混入)
18. 黒褐色土層 (灰褐色粘質土，焼土少量混入)
19. 暗褐色土層
20. 暗褐色土層 (焼土炭化物微量混入)
21. 黒褐色土層 (炭化物微量混入)
22. 暗褐色土層

第17図　滝遺跡第10次調査実測図(2)(1/60)



1. 黒褐色土層（ローム粒子少量混入）
2. 黒褐色土層（ローム粒子，焼土少量混入）
3. 暗褐色土層（ロームブロック多量混入）
4. 暗褐色土層（ロームブロック混入，粘性有）
5. 暗褐色土層（ローム粒子，焼土少量混入，粘性強い）
6. 暗褐色土層（ローム粒子，焼土少量混入）
7. 黒褐色土層（ローム粒子少量，焼土やや混入）
8. 黒褐色土層（ローム粒子，焼土少量，炭化物多量混入）
9. 暗褐色土層（砂粒混入，粘性強い）
10. 暗褐色土層（焼土ブロック多量混入）
11. 黒褐色土層（粘性強い）しまり良い
12. 焼土壁

第18図　滝遺跡第10次第11号住居カマド実測図　(1/30)

似しているが、溝2より新らしい。

土壙3(第16図)

南側を一部確認したに止まるが、他の土壙と類似した形態であろう。深さは約60㎝である。

溝1(第16・17図)

ほぼ直線的であり、西側はC－6区辺りで終わると推測される。幅は第11号住居址付近でやや広く、上幅70㎝、底幅40㎝、深さ50㎝であるが、他の部分は上幅50㎝の箱型を呈する。底面はほぼ平坦である。

遺物は、土師器小片が少量出土しているのみである。

溝2(第16・17図)

溝1の北側に平行し、調査区外へ東西に延びている。上幅50㎝、底幅40～35㎝、深さは東側で70㎝、西側で80㎝と西側へ傾斜している。底面は平坦で、形態、規模、覆土等溝1と類似している。

遺物は、土師器小片が少量出土しているのみである。

溝3(第17図)

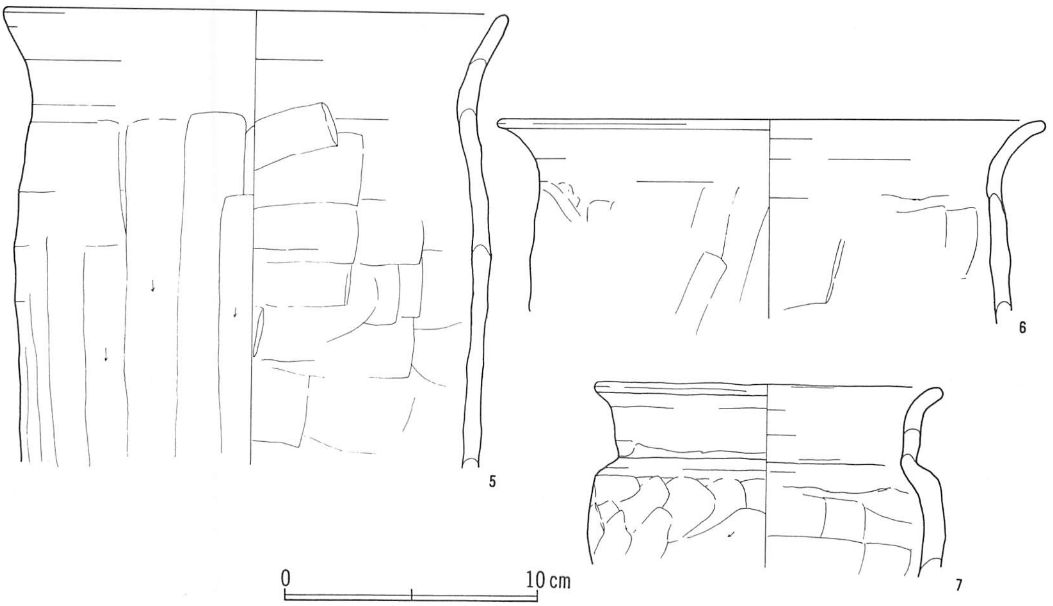
溝2より更に北側に、溝2にほぼ平行するように検出されたが、東側が北へ緩くカーブするようである。上幅55～45㎝、深さ15㎝、底面はほぼ平坦である。

遺物は、土師器・須恵器小片が少量出土しているのみである。

溝4(第16図)

調査区を南北に横切る溝で、溝1・2と直交する。溝2より南側は狭く、北側は箱薬研状である。

第19図　滝遺跡第10次第11号住居出土遺物実測図　(1/3)



第20図　滝遺跡第10次第11号住居出土遺物実測図　(1/3)

南側は、上幅 40cm、底幅平均 15cm、深さ 30cm。北側は、上幅 1m、底幅 25cm、深さ 40～35cm。底面は緩く凹凸があり、北側中央にピットが検出された。

この溝の南側を延長すると、第9次調査で検出された溝2の西側に繋がる。規模は相違するが、形態は類似し、両者は同一の溝である可能性がある。

ピット群(第17図)

住居址内及び周辺で15基検出された。住居址より新しい。形態・規模等に相違があり、住居址内に検出された径 20cm以下のピットは円形で不規則である。住居址周辺の径 40cm前後のピットは方形で規則的である。後者のピット群は間隔が約 2.5mで、建物址を構成するものと推測される。

3　検出された遺物

第11号住居址出土遺物(第19・20図)

1　土師器甕　カマド焚口部出土、底部周辺を欠損、現存⅙。推定口径 21.6m。色調は外面黄褐色、内面赤褐色。焼成は堅緻である。胆土は砂粒を多量、雲母粒子を含む。口唇部は強く外反し、胴部最上部に最大径がある。器表は、内外面に剥落が顕著で、整形が不明瞭である。胴部は全体的に薄作りである。

2　土師器甕　カマド西袖内出土、底部を欠損。口径 18.0cm。色調は茶褐色で、内面が少し黄色がかる。焼成は堅緻、胎土は小石、金雲母を若干含む。口唇部は軽く外反し、胴部は若干張る。口縁部横ナデ、胴部ヘラ削りは明瞭である。

3　土師器甕　カマド焚口部出土、底部を欠損、現存⅓。推定口径 18.2cm。色調は黄橙色、焼成は堅緻、胎土は小石、雲母粒子若干含む。口唇部はやや強く外反し、頸部に段を作らない。胴部は若干張る。口縁部横ナデ、胴部ヘラ削りは明瞭であるが、一部摩滅して不明瞭である。

4　土師器甕　カマド東袖内出土　底部周辺を欠損、現存¼、推定口径 22.0cm、色調は橙褐色で、内面は部分的に赤褐色。焼成は若干軟質、胆土は小石。雲母粒子やや含む。口唇部は軽く外反し、胴部の張りは弱い。摩滅の為に、口縁部横ナデ・胴部へラ削りは一部不明瞭である。

5　土師器甕　覆土出土　胴部下半を欠損、現存¼　推定口径 19.6 cm。色調は外面茶褐色、内面淡褐色、焼成はほぼ堅緻、胎土は小石若干、金雲母やや多量含む。口縁部は外傾し、胴部の張りは弱い。胴部へラ削りは明瞭である。

6　土師器甕　覆土出土　口縁部から胴部にかけて¼現存、推定口径 21.2 cm。色調は黄橙色、焼成は堅緻、胎土は金雲母粒子等若干含む。口唇部は軽く外反する。口縁部横ナデは明瞭だが、胴部は摩滅の為にヘラ削りが不明瞭である。

7　土師器小型甕　床面出土、口縁部から胴部にかけて¼現存。推定口径 13.4 cm色調は暗褐色、焼成は堅緻、胎土は金雲母等若干含む。「コ」字口縁で肩部は強く張る。口縁部から肩部横ナデ、胴部へラ削り明瞭である。

（小俣　悟）

Ⅳ　川崎遺跡(宅地添地区第４次)の調査

川崎遺跡は、武蔵野台地の縁辺に位置し北側へ延びる、巾 600 *m*、長さ 600 *m* の大きな舌状の台地上にある。この舌状台地は北側にいく程沖積地との比高差がなくなり、先端の部分では比高差約1 *m* である。西側は、武蔵野台地を開析した小川（江川）がつくった沖積地であり、北、東側は荒川の一支流の新河岸川がつくった沖積地である。

川崎遺跡は、大字名をとった総称である。縄文時代から奈良、平安及び近世にいたるまで人々の活動の舞台となった場所である。このうち小字宅地添の周辺を、これまで宅地添遺跡として３回の調査を行ってきた。ここでは、この３回の調査を踏襲し、第４次調査として報告しておく。

これまで川崎遺跡で行った調査の概要は下記のとおりである。

	縄文前期住居	古墳時代前期住居	古墳時代後期住居	奈良～平安時代住居
第１次調査	3	1	0	6
第２次調査	9	0	5	10
第３次調査	2	0	0	6
第４次調査	1	0	0	0
第５次調査	1	0	0	3
第６・７次調査	0	0	0	0
宅地添第１次調査	1	0	0	0
第２・３次調査	0	1	0	0
計	16	2	5	25

のと思われるが、いずれにしろ一系をもったものである。これ等の1(A)や17に代表される土器の展開の中で、３の土器文様が反転されたような、無文で渦を巻き、２段で構成される、志久８号住や東京桐ヶ丘出土例、茨城砂川第２号埋設土器のような均一的な一群が、称名寺Ⅰ式でも後半に出現すると考えている。

以上から、当遺跡出土の一群を、相対的な位置付けとして、称名寺式土器が、南関東を中心として、文様の構成が統一化される、すなわち継に渦巻文や鉤針状の文様が構成される一群をもって、Ⅰ式後半とすれば、Ⅰ式前半でも限りなくⅠ式後半に近い段階として考えておきたい。(笹森健一)

2 滝遺跡第10次のまとめ（・滝遺跡における第11号住居跡）

今回検出された第11号住居跡出土の土器は大半が土師器甕であり、他は土師器壷、坏の小片が確認できたのみである。土師器甕と判断した土器には甑と思われるものもあるが明らかではない。

土師器甕は全て長胴であり、胴部の膨みが弱く最大径が胴部から口縁部へ移行する段階である。頸部は直立気味で口縁部は強く外反する。胴部外面の整形は縦ヘラ削りである。以上の特徴から、本住居跡出土の甕は古墳時代後半、鬼高Ⅱ期末～Ⅲ期初に位置づけられる。

一方住居形態から検討すれば、カマド出現後一般に小型住居が顕著になり、整然とした四本住穴が崩れ、平安時代には無柱住居も出現する。しかもカマド燃焼部が、奈良時代以降住居壁外へ突出する。本住居跡は 4.45×3.8*m* と小型で柱穴は明確ではなく、かなり新しい傾向を示す。しかしカマド燃焼部は住居壁内にあり、奈良時代以前の特徴を示しており、住居形態からも古墳時代後半の様相を呈している。

本住居跡が立地する高位台地南縁上には該期の住居跡は未確認であるが、低位台地上には、本住居跡直下に第２号住居跡、東方新河川沿岸に第10号住居跡、丸橋遺跡 LN01 号住居跡が検出されている。第２号住居跡からは土師器甕・坏・須恵器蓋が出土している。土師器甕は長胴で口縁部が外反し、最大径が胴部から口縁部へ移行する段階である。土師器坏は口縁部が軽く外反し、底部は浅く丸みが弱い。須恵器蓋は小型で半球形であり、陶色編年(中村浩他1978)による第Ⅱ型式第６段階に相当しよう。以上の検討から第２号住居跡は第11号住居跡に近似した時期の所産であろう。

第10号住居跡、LN01号住居跡は良好な土師器甕はないが、土師器坏・高坏等が出土している。土師器坏は両住居跡とも２種あり、口縁部がほぼ直立し、明瞭な稜を有しやや浅めの底部へ移行する坏と、口縁部が内傾気味で口唇部が外反し、底部との稜がやや不明瞭な坏である。共に鬼高Ⅱ期に位置づけられるが、第２号住居跡に先行する時期であろう。更に両者の住居形態を検討すれば、規模・方位がほぼ等しく、またカマドの構築も地山削り出しであり共通している。

一方第11号住居跡と第２号住居跡も規模・方位が近似し、カマドの構築も掘り方を埋め戻し粘土製の袖を築く技法が共通する。しかし第11号住居跡はカマドの袖に甕の芯を使用しているが、第２号住居跡は袖に芯を使用していない。

第10号住居跡と LN11号住居跡は時強、形態等を等しく同一集落（単位集団）を形成している。一方第11号住居跡と第２号住居跡も時期、形態がほぼ等しく同一集落を形成する可能性があるが、立地を異にし、カマドの構築でも若干相違があり、高位台地と低位台地に各々別集落を形成するもの

と推測したい。しかし両者が全く無関係に存在していたとは考えがたい。

3　滝遺跡第11次調査のまとめ

近年近世考古学の調査・資料の分析が都東、城郭及び生産遺跡で盛んになり、遺物の研究も、特に陶磁器を中心として発達している。中でも瀬戸・美濃陶器・伊万里磁器・唐津陶器は焼成窯の調査が継続的に行なわれており、陶磁器の変遷が解明されつつある。最近の研究では年代的な検討も大略50年単位で提出されている。最近の主な研究としては瀬戸・美濃陶器については田口昭二氏(1983他)等、伊万里磁器については大橋康二氏(1984)等が見られる。しかしこうした生産地側での研究も現状では不充分なもので、年代的な変遷については未だ、大雑把であり、確定しえているものではなく、近年の消費地側の調査時例に対応できない点も見られる。今後、生産地側の研究を深化させてゆくことは無論、消費地側からの資料を基礎にした分析を進めてゆかなければならない。

まず遺物の時期について私見を加えておきたい。

瀬戸・美濃系鉢は鉄釉の様相及び器形から19世紀前半、瀬戸・美濃系小碗・土師質灯明皿は18世紀後半から19世紀にかけて、瓦質火鉢は19世紀前半を中心とすると推測される。また「天保通宝」は天保年間(1830～44)である。図示してはいないがC′−15区の遺物に染付広東碗、唐草文花瓶、梅樹文小碗、瀬戸・美濃系灰釉徳利、ルス釉鉢、京焼系松茶碗、色絵茶碗等が出土しており、大略18世紀後半から19世紀前半と推測している。

次に遺構を検討しておきたい。今回出土した遺物は大半が小片であり図示しえたものは少なく、1号集石の時期を判断するには多少無理がある。しかし、C′−15区出土の遺物を1号集石に関連するものと判断すれば1号集石の年代は19世紀前半が妥当であろう。崖面の開削は、段状遺構及び集石の形成と関連していると推測されるので、開削時期の下限は19世紀前半になろう。

1号集石の遺物は全て日常雑器でしかも破片である。同様な例は、本調査区より南方約350*m*に所在する長宮遺跡第8次(小俣他1982)でも近世の小集石が検出されている。長宮遺跡例は溝23内に形成されているが、やはり自然石に混入して擂鉢等日常雑器片が出土している。時期は18世紀後半から19世紀にかかると推測され、屋敷跡の一部と判断される。

このような類例が現状では少なく、今後の課題としなければならないが、長宮遺跡例を含めて敢えて検討すれば集石及び現状遺構は屋敷跡の一部と推測される。遺物から判断すれば屋敷の形成は下限が18世紀後半になろう。同時に崖面も削開された可能性がある　(小俣　悟)

郷土史料第31集　埼玉県上福岡市内遺跡群　埋蔵文化財の調査(Ⅷ)

発行　1985年3月30日

発行　埼玉県上福岡市教育委員会　〒365　埼玉県上福岡市大字福岡1500－58

TEL　0492－61－2611（内556)

印刷　新日本印刷株式会社　(東京都新宿区市ケ谷本村町3−29)

1

2

3

4

1.滝(第10次)調査風景

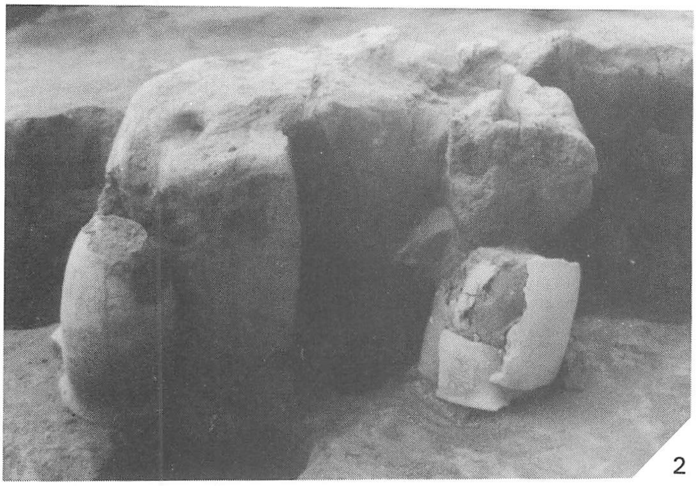
2.　同

3.同第11号住居址
全景(南より)

4.　同　(東より)

PL 6

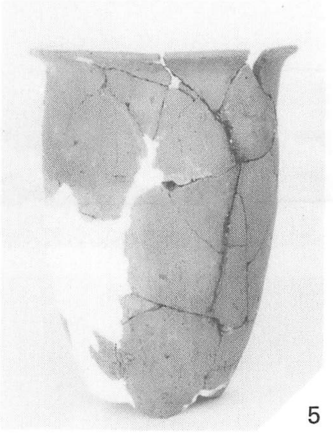
1



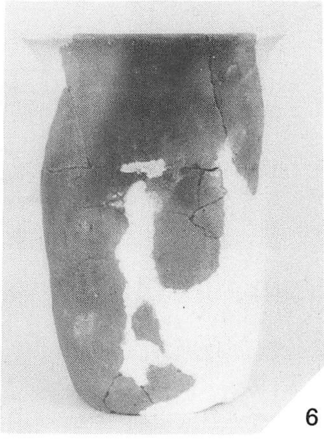
2

3

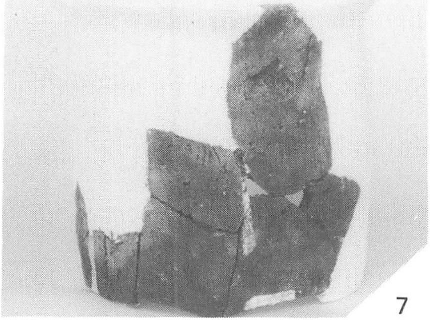
4



5



6



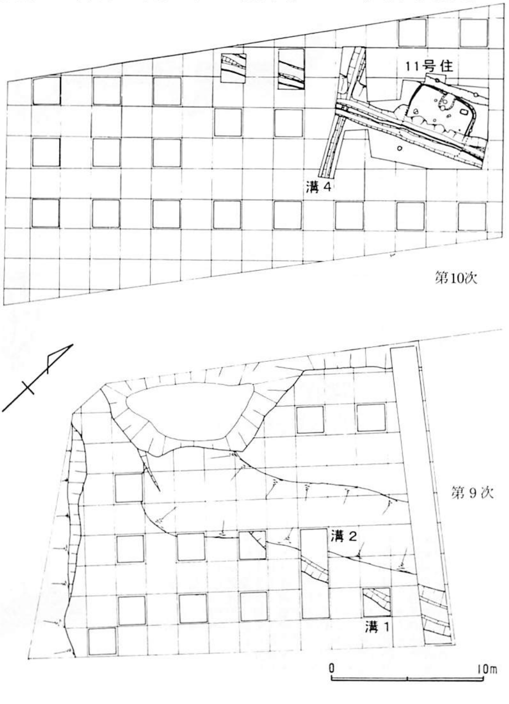
7

1.滝(第10次)第11号住居址カマド
2.同カマド(正面より)
3.同出土土器(No.1)
4. 〃 (No.2)
5. 〃 (No.3)
6. 〃 (No.4)
7. 〃 (No.5)

旧福岡構内土師集落跡出土土器（第２－42図）

1937（昭和12）年夏、山内清男によって調査された福岡構内遺跡（上福岡貝塚）内の東南部の古墳時代集落跡（α～ζ号住居跡の一部）から出土した資料である（第２－１図）。

１は、胴部内面を除き全体に磨きが施され底部を欠損する二重口縁壺（出土地点は不明）。２は、パレススタイルの大形壺。肩部に断面三角形の隆帯をめぐらし、７本単位の櫛描き平行横線文と鋸歯状文が描かれ、下半は赤彩される（出土住居の帰属は不明）。３は、底部の突き出しが著しい口縁部が欠落した壺で、溝１出土の壺に非常に類似する。β号住居出土と思われる。４は、ヘラ磨きが丁寧に施された小形壺。５は、内外面とも上位に赤彩が施された坩。６～８は、ヘラ磨きが施され、脚部に３個の円孔があけられた小形高坏。９は、脚部を欠く台付甕。口唇部に刻み目を施す。10は、折り返し口縁の甑で器面には刷毛目調整を施されている。α号住居出土のものであろう（文献14・53・64）。

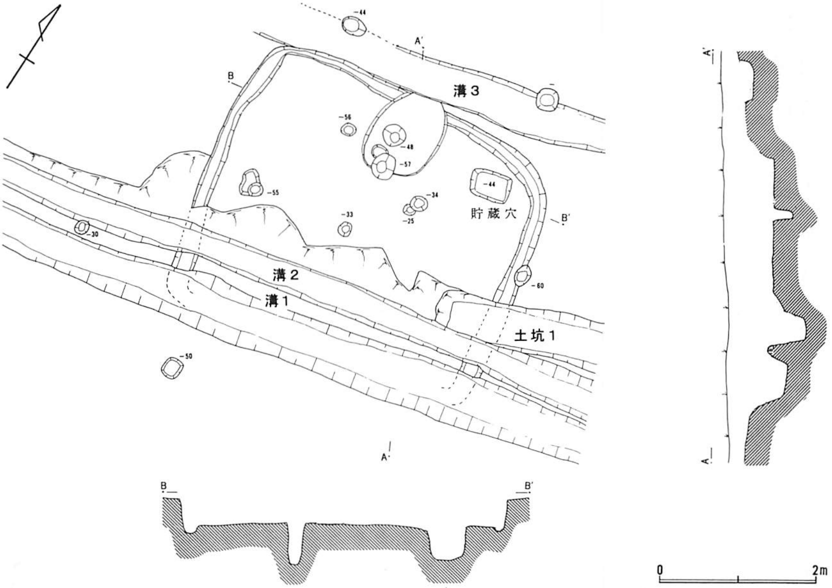


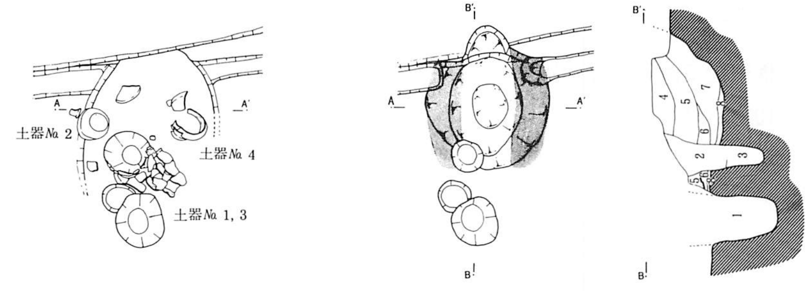
第２－43図　権現山遺跡11号住居跡等遺構配置図（旧滝遺跡第９次・10次）〈１／500〉

②後　期

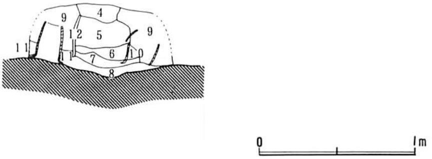
権現山遺跡＝旧滝遺跡第10次11号住居跡（第２－44図）

確認面が浅く、南半分は後世の溝によってほとんどが破壊されている。東西４m45、南北推定３m80の隅丸方形の住居。壁はほぼ垂直である。周溝はカマド部分を除いて全周するものと推定される。床面は平坦で比較的しっかりしている。





1. 黒褐色土層 (ローム粒子少量混入)
2. 黒褐色土層 (ローム粒子, 焼土少量混入)
3. 暗褐色土層 (ロームブロック多量混入)
4. 暗褐色土層 (ロームブロック混入, 粘性有)
5. 暗褐色土層 (ローム粒子, 焼土少量混入, 粘性強い)
6. 暗褐色土層 (ローム粒子, 焼土少量混入)
7. 黒褐色土層 (ローム粒子少量, 焼土やや混入)
8. 黒褐色土層 (ローム粒子, 焼土少量, 炭化物多量混入)
9. 暗褐色土層 (砂粒混入, 粘性強い)
10. 暗褐色土層 (焼土ブロック多量混入)
11. 黒褐色土層 (粘性強い) しまり良い
12. 焼土壁



第2－44図 権現山遺跡＝旧滝遺跡跡第10次11号住居跡〈1／100・1／50〉

第２－45図　権現山遺跡＝旧滝遺跡第10次11号住居跡出土土器〈１／５〉

床面に数基のピットが見つかっているが、主柱穴と断定できるものはない。カマドは北壁の中央に設置されている。カマド袖(そで)の芯(しん)として土師器甕が倒立されている（文献45）。

出土遺物（第２－45図）は、カマド袖から土師器甕（２・４）、焚口部(たきぐちぶ)付近から土師器甕２個体（１・３）、貯蔵穴南方の床面上から土師器小型甕（７）、覆土からも土師器甕（５・６）が見つかっている。その他、坏の細片が数点出土している。住居の時期は出土土器から６世紀第４四半期になると考えられる。

（３）飛鳥・奈良・平安時代の集落

権現山遺跡第４次５号住居跡（第２－39図）

東隅のみの調査にとどまる。ローム面から床面までは約45㎝の比較的深い住居跡である。床面は良く踏み固められていた。カマドはコーナー部分に設置されていた。出土遺物は、平安時代国分期の土師器甕の破片、須恵器坏の破片、土製支脚などが出土している。他にも覆土中から鉄滓(てっさい)が数点見つかっており、小鍛冶に関係した住居跡とみられる（文献46）。

権現山遺跡第４次６号住居跡

調査区の南東隅に床面だけを確認した。出土遺物は須恵器の破片が数点出土したにとどまった（文献46）。

○権現山遺跡1988年調査区（旧上福岡貝塚）
（第２－46図、文献50・本書）

権現山遺跡1988年調査区１号住居跡（８号住居跡）（第２－47図）

東西３m40、南北３m20の方形である。周溝はほぼ全周している。柱穴は見つかっていない。カマドは東壁のほぼ中央に設置されている。南側には掘られた痕跡があった。

出土遺物（第２－47図）は、土師器甕がカマド内より（１）、カマド前面より（２・３）確認され、カマド左側より白色針状物質を多量に含んだ須恵器坏（４）と右側より続比企型坏(ぞくひきがたつき)（５）が出土した。

権現山遺跡1988年調査区２号住居跡（９号住居跡）（第２－48図）